

複数担任制による学級・学年経営方法の確立

～「チーム学校」による協働体制作り～

1 はじめに

中学校における複数担任制の導入は、生徒の多様なニーズに対応し、教育の質を向上させる有効な手段として注目されている。中学生は心身ともに大きく成長する時期であり、学習面のみならず、生活や心理面でも細やかな支援が求められる。しかし、一人担任制では生徒全員への十分な対応が難しい場合がある。さらに、教員の過重労働が問題視される中、働きやすい環境づくりも重要な課題である。

複数担任制は、教員間で業務や責任を分担し、生徒一人ひとりに適切な支援を提供する仕組みである。本研究では、複数担任制の導入による効果や課題を明らかにし、生徒と教員双方にとってより良い教育環境を構築するための知見を得ることを目的とする。

2 研究の経過

2024年1月に「複数担任制に関する委員会」を設置し、以下の手順で導入準備を進めた。

- 1月：「複数担任制に関する委員会」設置、職員会議で説明
- 2月：「新入生説明会」にて保護者・生徒へ制度を説明
- 3月：「複数担任制の運用方法」を検討
- 4月：1年生から順次導入

3 研究の内容

(1) 現行の1人学級担任制について

① 責任の集中と負担の大きさ

学級運営の責任集中：1人の教師（担任）が学級の全てを背負い、大きな責任を負う。

保護者対応の孤立感：家庭訪問や懇談など、苦情対応を含む保護者対応を基本的に1人で行う。

教科授業の影響：教科授業での成否が担任の学級運営問題として扱われることがある。

② サポート体制の不十分さ

相談のしにくさ：学級のしんどさを他の職員に相談しづらく、相談すると指導力不足と見なされる可能性がある。

助けを求めづらい環境：相性の悪い子どもや過度な要求をする保護者への対応で孤立しやすい。

周囲の比較プレッシャー：保護者や子ども、職員から他の学級と比較されることが多く、ストレスの原因になる。

③ 報連相の不足

情報共有の欠如：報告・連絡・相談が不十分になり、担任1人で問題を抱え込むことが多い。

問題行動の対応遅れ：いじめや問題行動の発見・対応が遅れる場合がある。

④ 休暇取得や働き方の制約

休暇取得の困難：気の抜けない学級では休暇取得が難しく、負担が集中しやすい。

権利への配慮不足：病気や家庭事情、子育てなど正当な理由で担任が困難な教諭が増加しているが、体制の柔軟性が不足している。

⑤ 生徒指導の限界

単一視点による限界：1人の教師が生徒を見取る場合、多様な視点が不足し、課題の発見や対応が遅れることがある。

このように、一人担任制では「責任の集中」「孤立感」「サポート不足」が大きな課題となっている。複数担任制や協働体制の構築が解決策として考えられる。

(2) 複数担任制の指針と運用方法

導入目的

- ◇ 生徒の生活や学習の支援を充実させる。
- ◇ 多角的な視点で生徒を理解し、個性の伸長を図る。
- ◇ 学級運営の課題を一人の担任が抱え込まない体制を整える。

対象と配置方法

2024年度の1年生から順次導入予定である。本校では、2学級に対して3人の固定担任（A、B、C）を配置し、3人が常に2学級全体に責任を負う仕組みを採用している。これにより、1学級あたり1.5名の担任配置を可能とし、追加の人員を必要とせず全学年で実施可能としている。さらに、短時間勤務の教諭や講師は4人目の担任として配置され、全ての担任が平等に責任を負うシステムを構築している。

情報共有

GoogleドライブやGoogleチャットなどのデジタルツールを活用した「デジタル連絡帳」「生活記録」「生徒指導記録」を用いて情報を共有。報連相の徹底を図る。

評価方法

学校評価アンケート、不登校率、教育相談の状況などを調査し、制度の効果を検証。

「パーソナルチューター制」の導入

学級担任とは別に、生徒が選んだ教師を「相談相手」とする制度を併用。

(3) 複数担任制の効果と課題

生徒への効果

安心感と信頼関係：相談しやすい環境が整備され、生徒が「見守られている」と感じやすくなった。

多角的な支援：複数の目で生徒を理解することで、不登校の抑制や個別の課題解決が進んだ。

満足度向上：学校評価アンケートで、生徒の95%以上が「学校生活が楽しい」と回答した。

不登校発生率の低下：担任との相性の良い教員を選び相談できる仕組みにより、登校に安心感を持つ子どもが増加。不登校が30%減少し、ストレスチェック調査から、子どものストレス値も例年より大幅に軽減した。

教師への効果

負担軽減：業務の分担により、教師が心に余裕を持って指導できる環境が実現できた。

指導力向上：異なる視点を持つ同僚と協力することで、新たな気づきが得られた。

働き方の柔軟性：平日の休暇取得が可能になり、ライフプランの選択肢が広がった。

学校全体への効果

安定した学級運営：トラブル時に複数の担任で対応可能。

評価の向上：保護者や外部から、教師間の連携や積極的な生徒指導が高く評価されている。

保護者からのクレーム減少：教師に起因する子どものストレスが軽減された結果、保護者からのクレームが減少。

教職員育成環境の最適化：中堅、新任、臨時講師が混在するチームでも孤立感が少なく、担任経験が浅い職員を育てる最適な環境を提供。

課題

情報共有の徹底：教師間で情報を十分に共有しないと、生徒対応に不一致が生じる可能性がある。

公平性の確保：担任による対応のばらつきが生徒に不平等感を与える場合がある。

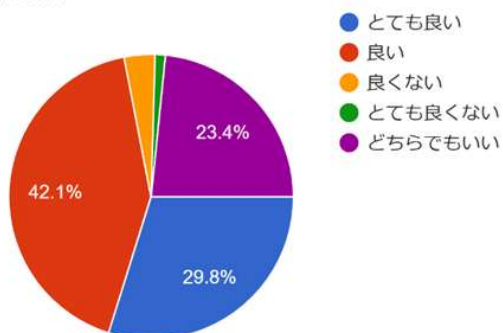
目標の統一：チームとしての方向性や目標を明確にし、協力体制を強化する必要がある。

(4) アンケート結果

複数担任制のもと学校生活を送る生徒の回答

1.複数担任制について、あなたはどのように思いますか？

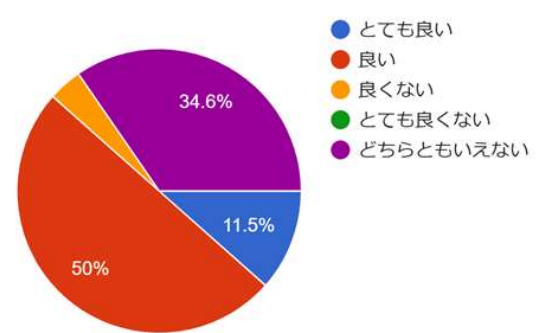
171件の回答



複数担任ではない教師の回答

1.複数担任制の導入について

26件の回答



生徒の回答

「複数担任制について、あなたはどのように思いますか？」という問いに「とても良い」「良い」と回答した理由。

- いろんな先生とコミュニケーションがとれるから
- 相談できる先生が増えた

- 入れ替わるから毎朝楽しい
- 場合に応じて相談する先生を変えられるから
- どの先生もおもしろいし、先生と合う、合わないがあるから、自分が一番相談しやすい相手に相談できるから。

「複数担任制について、あなたはどのように思いますか？」という問いに「良くない」と回答した生徒の理由。

- 体育祭や文化祭で2クラスを応援したりするのは両クラスにとってあまりいいとは言えないから
- 3人の言っとなることが違う時があるからわからない。
- 3人もいないから。

複数担任教師の回答

「複数担任制について、あなたはどのように思いますか？」という問いに「とても良い」「良い」と回答した理由。

- 子どもにとっては、話しやすい先生、苦手な先生と必ず存在する。そのため、子どもにとっては話しやすい先生を選び相談できるのでストレスがなく、よい環境になっているのではないと思う。周りの先生と同じ環境で2クラスを見ているため多くのことを共感でき、何かに対応する場合でもチームとして動けるため、より子どもたちに親身に対応できているのではないと思う。また、個人的には色々な先生の良いところを身近で見ることができ、吸収できるため良いと思った。
- 異なる視点で生徒と関わることができ、ハッと気付かされることが何度もあったから。また、複数の教員で関わる大前提があるので、一つのクラスを1人で抱え込まなくて良くなったから。
- 経験が少ない中でなんとかついて行かせてもらっている
- すべて初めての事ばかりだったので、周りの先生方を見ながら、自分もこうしていこうと、自分なりのリズムが作れるようになったから。

校内の教師の回答

「あなたの考える複数担任制を運営する上で特に注意したほうがいいと思うこと」という問いへの回答

- 例えば、2人、3人の複数担任にチーフを決め、運営をするのもいいかもしれない。学年係も担任の一人で、学年係と複数担任のチーフと常日頃から方向性（見通し）を持つ。
- 教師自身が責任感・向上心などを強く持つ。人任せにしない。
- 情報共有や意識の共有を密にしなければ、いい加減な学級経営になる可能性が高い。

4 研究のまとめ

本研究では、中学校における複数担任制の導入について、その効果と課題を検討した。複数担任制は、生徒一人ひとりにきめ細かい支援を提供するだけでなく、教師同士の協働体制を確立することで、各教師の個性や持ち味を最大限に生かす可能性を持つ。例えば、生徒指導に強い教師と学習指導に優れた教師が連携することで、生徒の多様なニーズにより適切に対応できる。一方で、担任間の役割分担の明確化や情報共有の仕組みを整備する必要があることも明らかになった。また、保護者や生徒とのコミュニケーションにおいても、新しい体制に応じた調整が求められる。これらの課題を解決するためには、実践を通じた運用モデルの構築と共有が重要である。本研究の成果が、教師の能力を最大限発揮できる教育環境の構築に寄与し、生徒と教員双方にとってより良い中学校教育を実現する一助となることを期待する。